

白山麓鳥越城と加賀一向一揆の解体



鳥越城跡から白山麓の平野部を望む（白山市）

石川県白山市別宮町（旧石川郡鳥越村）に所在する国指定史跡鳥越城跡は、加賀一向一揆最後の砦として知られている。戦国末期の元亀元年（1570）、天下統一を目指す織田信長と大坂の石山本願寺の間で、いわゆる「石山合戦」が始まった。次いで天正元年（1573）、織田方が朝倉義景^{※1}を滅ぼし越前に進出すると、本願寺門徒の北陸一向一揆勢力に軍事的緊張感が高まった。加賀における一向一揆の城砦のほとんどは、この頃、織田方の侵攻に備えて構築・拡張整備されたものである。

石山合戦と織田勢の加賀侵攻

天正3年（1575）8月、越前一揆の叛乱を完全制圧した織田勢は、その余勢を駆って加賀国の江沼・能美両郡に侵攻し、信長の部将明智光秀が、南加賀の占領地代官に任命された。

さらに同5年（1577）8月になると、柴田勝家率いる織田勢が、一向一揆支配の加賀国の制圧に向けて進撃を開始する。当時能美郡には、御幸塚城（現小松市今江町）に柴田方の佐久間盛政^{※2}が配置されており、それと対峙する同郡の波佐谷城（現小松市波佐谷町）

には、金沢御坊^{※3}の堂衆宇津呂丹波や岸田新四郎・三林善四郎が派遣され、一揆方の南加賀の前線基地を守っていた。

柴田軍はその後、手取川を渡河して北加賀の石川郡に攻め入るが、ここで一揆方の支援に駆けつけた上杉謙信の迎撃をうけ、9月23日、手取川の夜戦で敗北し、南加賀に撤退する。

またそれに先立ち本願寺顕如^{※4}は、天正元年（1573）11月に、同寺内衆の七里頼周らを金沢御坊に派遣して、門徒組織の再編・強化をはからせており、さらに同4年（1576）11月にも、内衆の下間頼純を本願寺上使として加賀に下し、織田軍の侵攻に備え、北陸における本願寺派坊主・門徒衆の結集にあたらせた。

柴田軍の進攻と金沢御坊陥落

天正7年（1579）8月、再び織田方の柴田勝家軍が加賀に進攻し、能美郡の安宅・本折・小松付近（現小松市内）を焼き払ったが、やがて勝家は一旦越前に帰陣した。

次いで翌8年（1580）3月17日に至り、正親町天皇^{※5}の仲介によって、織田信長と本願寺顕如の間で和

※1 越前朝倉家最後の当主。7代貞景から5代にわたり越前一国を支配したが、姉川の合戦で敗れ、越前大野で自害。

※2 柴田勝家の甥。鬼玄蕃（おにげんば）の異名をもつ勇将。金沢城初代城主。賤ヶ岳の戦いで敗れ斬首となる。

※3 加賀における本願寺の別院。柴田軍に攻め落とされ、跡地は後に前田氏の金沢城となる。

※4 本願寺第11世。信長と敵対し、各地の門徒に蜂起を呼び掛けた。

※5 第106代天皇、在位弘治3年（1557）～天正14年（1586）。永禄11年（1568）の織田信長の上洛以降、信長や豊臣秀吉の宮廷復興策により、権威を回復する。

議が成立したが、翌閏3月になっても、柴田軍は3度目の加賀進攻を敢行し、手取川を越えて北加賀に攻め入り、石川郡の宮腰（現金沢市金石町）に布陣した。その後所々に放火した後、同月9日、同郡の野々市（現野々市市）に楯籠る一向一揆勢を攻め落とした。

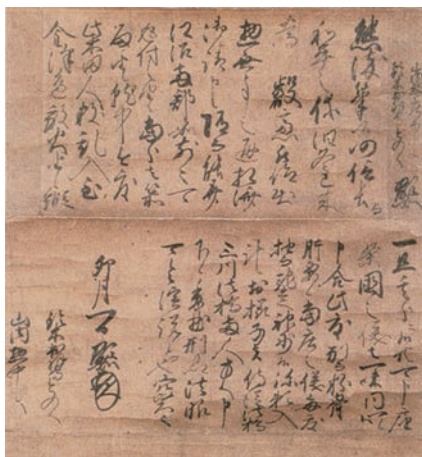
信長は、11日になって柴田勝家に加賀国における休戦を命ずるが、加賀では依然として一揆方の抗戦が続いており、そのため14日に柴田方の佐久間盛政が、能登の織田方武將長連龍^{※6}の協力を得て、北加賀河北郡一揆衆の拠る木越砦（現金沢市木越町）を陥落させた。

翌4月になると、柴田軍による加賀一向一揆の本拠であった金沢御坊への攻撃が開始され、やがて御坊は陥落する。このため本願寺から派遣されていた御坊の堂衆たちは、加賀山間部の門徒衆らと結び、能美丘陵一帯から白山麓にかけての城砦に楯籠り、柴田軍に抗戦を続けることになる。

石川郡舟岡山城（現白山市八幡町）に若林長門守、能美郡虚空蔵山城（現能美市和気町）に荒川市助、同郡波佐谷城に宇津呂丹波、江沼郡日谷城（現加賀市日谷町）に岸田常徳、白山麓鳥越城に鈴木出羽守が拠ったと伝えられる。だがこれら一揆方の諸城も、やがて柴田軍の調略によって、秋頃には相次いで攻め落とされたらしく、同年11月に、これら一揆方の城将とその一族の首級19が、近江安土城の織田信長の許に送られ、城下松原町の西に晒された。

鈴木出羽守と白山麓の合戦

こうした加賀一向一揆の解体に際し、白山麓の本願寺門徒が最後まで抵抗を続けた軍事的拠点とされる鳥越城跡では、これまでの発掘調査によって、主郭に相当する「本丸」と、周囲に展開する4箇所の曲輪（平坦面）の構成が確認でき、礎石建物・掘立柱建物・柵列・門扉跡と石垣等が検出されている。出土した遺物には、中国産の青磁・白磁・染付や国産の越前・美



本願寺頭如消息（白山市林西寺所蔵）

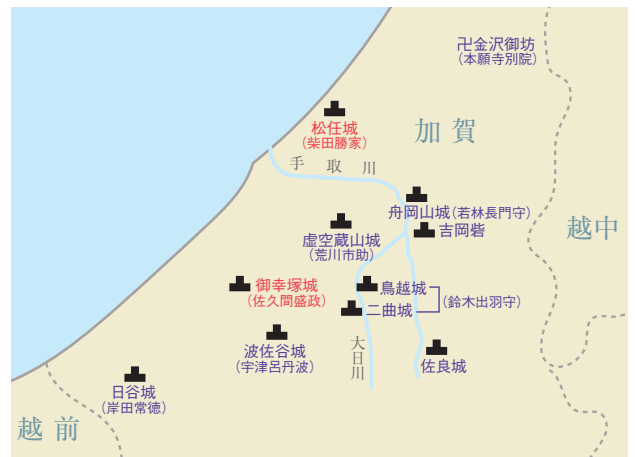
濃・瀬戸産の陶器類のほか、刀装具・鎧部品と鉄砲玉や、鉄の精錬工房跡・小鍛冶跡も発見されており、城内で武器・武具などを製造していたのが知られる。

鳥越城の総大将は、白山麓の一向一揆組織「山内惣庄」を統率する鈴木出羽守で、戦国末期の石山合戦時に本願寺から加賀に派遣された、鉄砲の技術に長ける紀州雑賀一揆の首領鈴木孫一の一族であったらしい。

加賀の一揆組織は、河北・石川・能美・江沼の4郡と、本願寺から篤信の門徒集団と期待された山内（白山麓）4組からなる山内惣庄によって構成されており、出羽守は、二曲城主であった山内西谷組の旗本二曲（山内）右京進の遺跡を継承し、惣庄の門徒を指揮して柴田勝家軍に対峙していた。その後、勝家からの和睦の申し出を受けて松任城に赴いたが、その場で謀殺され、鳥越城も陥落したといわれる。そのため安土で晒された一揆衆の首級の内に、出羽守と子息の右京進・治郎右衛門・太郎と一族鈴木采女^{うねめ}の5人が含まれており、抵抗を続けた一揆衆の中でも、重きをなす存在であったらしい。

その後天正9年（1581）2月になって、白山麓門徒が蜂起し、鳥越・二曲両城を奪回したが、金沢城から駆け付けた佐久間盛政に鎮圧された。

翌10年（1582）2月に、再び山内惣庄内の吉野組の門徒衆が蜂起するが、これも佐久間軍によって白山麓手取川右岸の吉岡・佐良の砦が落とされ、3月1日、生捕りにされた一揆衆数百人が磔刑に処せられた。ここに加賀一向一揆は消滅する。このため吉野組内の白山麓七カ村は根絶やしとなり、以後3年間、荒地と化したと伝えられている。



鳥越城合戦図

※6 能登畠山家家臣。七尾城落城の際、一族で唯一生き残る。信長より能登国の鹿島半郡を与えられ、後に前田利家の与力となる。